

平成24年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻7月号(通巻426号)

風土



7

雲の峰
神蔵器

白日傘のぼる鎌倉文学館

金輪際蛇笏全集朴咲けり

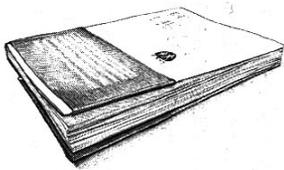
神々を恋して深山蓮花咲く

立札や竹の皮脱ぐ音の中

桂郎の亡くて筍流しかな

噛めば甘し万願寺なるたうがらし
一葉の水の冷たし手押し井戸
沙羅散るや三人冗語の石の上
太宰忌や泥まみれなる雀つこ
これやこの親竹をぬく今年竹
筆休卯の花垣に人の恩
白服の三鬼の立てり雲の峰

かつて三鬼・昭・桂郎鶴川村に現る



竹間集

同人作品



一 締 の 瀬 戸 悠

地下墓地に降りる階段花の冷
教会の三角屋根や花蘇枋
止り木に先客ありぬ春シヨール
屋上に干されし病衣花ぐもり
葉桜や鏡いくたび踏み外す
ひなげしや十歩へだてて耶蘇の墓
一締の紙の重さよ春の月

行く春 塩田 博久

露天湯に先客ひとり春の月
行く春や琵琶湖周航歌口の端に
観桜の幹事余寒をしきりに詫び
白牡丹花びらごとの海の風
白牡丹たてがみのごと吹かれをり
暮るるまで歩く鎌倉竹の秋
貝塚は由来記のみに夏鶯

花吹雪 代田 青鳥

花吹雪城の真下の墓参かな
道三の城高高と春祭
山桜宿の真下に屋形船
ステッキのよく似合ふ街リラ咲けり
ライラック足細くなる女学生
足三本杖に縋りし薄暑かな
杖の柄鎌倉彫や街薄暑

医 王 山

田中佐知子

春潮に打ち寄せられし胡桃かな
あてどなく拾ふ貝殻鳥雲に
医王山蛙の声のよく通り
観音の山ふところに春子楳
咲き満つる花の坩堝に観世音
初燕鉄砲狭間をよぎりたり
万緑や墳に副室主室あり

古希迎ふ

工藤ミネ子

干餅のうすもも色の吊るさるる
穢^{きは}れなき雪の轍や古稀迎ふ
かじけ鳥鼻すぢ白く水脈流す
捨つる瓶透くまで洗ふ多喜二の忌
鳥の影透くる四温の櫛かな
雪吊の弛む百日留守の家
彼岸寒骨組み粗き市たたむ

残る鴨

柴田久子

蕉庵に休園の札竹の秋
道形に川音ちがふさくらかな
約束のあるごと並び残る鴨
闇に浮く桜の帯の神田川
種袋振つて大室山晴るる
惜春や雨のち晴れの旅果つる
蛙鳴くみんな岡本太郎の目

花に会ふ

中村 洋子

花に会ふ西行に遇ふ日和かな
醍醐寺に仕立上がりの花衣
鯉泳ぐ応挙の板戸おぼろかな
正坐して蕎麦屋「安兵衛」花の膳
蛙鳴く魚板の吊らる翁堂
句帳よりまなこ移せり蝶の屋
花人となりて一と日の手を洗ふ

旦夕抄

—野沢しの武—

弟の方が強さう甲虫
亡き父が話題となりし新茶かな
耳遠くなりしとおもふ穴子飯
薄暑に読む友の閉院挨拶状
雲は夏大き切手の葉書来る
木苺を摘まざるは惜し摘めば淋し
もう一度振り向きてより植田去る
堰より飲む朝の牛乳夏来る
耳遠を憚る吾に父の日来る
われ亡き夏われを呼ぶ朋もうをらぬ

山河集

同人作品



神蔵器選

満天の星を産みたる春嵐 根岸 善行

樹の上の雲を分かちて囀れり
一枚を脱ぎ捨ててある花衣

春あけぼの雲を誘ひて島浮かぶ
揚げ雲雀雲搔き回し搔き回し

白面の神官なりし夜の桜 天野みゆき

合格子不意に逆立ちして歩む
にんげんを呼ぶ声なるや青葉木菟

散る花を一指にとどめ思惟仏
在五忌や男点茶の端正に

大菩薩越えて整ふ帰雁かな 森下 岩男

源平の池に等しく花筏
葱坊主うしろ歩きのジャンケンポン

大東京統べるツリーに黄砂かな
別れ霜地震の陸奥今日越えて

つばめ来る城下に雨のありながら 高村 傘子

隠しても出る国訛つばくらめ
早蕨や菩提寺までは坂がかり

水音の硬さをほぐす花筏
灯の入りて闇の深まる城桜

城址より見ゆる生家や鳥雲に 落谷 絹代

芽柳のなびく倉敷美術館
自衛隊の官舎幾棟辛夷咲く

のどけしや付き来る矮鶏の範囲かな
待ち呉るる故郷の膳に桜鯛

◇特別作品◇(抄)

浪切不動院

小林 共代

葉ざくらはや成東不動長勝寺
風青し膝の高さの弥陀の磴
まなかひを蛇の横切る法の庭
山腹の袈裟掛巖の竜の髯
万緑や弘法大師修行像
風薫る僧より受くる長寿箸
柿の花左千夫生家の土間くらし
雄蛇ヶ池茅花流しの渡りけり
扁額の一期一会や夕薄暑
露天湯の底に木目や青木賊

風土独語／神蔵器



唇にひとひら花の雨ならむ

遊橋 惠美

下五の「雨ならむ」の「ならむ」は、①断定の助動詞「なり」の未然形「なら」に推量の助動詞「む」の付いたもの。「…だろう」とか「…なのだろう」。②連体形の用法では、仮定の事柄、想像した事柄を表す。「…であるような」などとなる。(大辞林より)
さて、掲出句だが、モデルは勿論本人、ナルシズムの粋の極致である。ひとひらの花びらと花の雨ならむは、微妙にゆれる作者の心理の陶醉である。男としてはいささか妬ましいが、艶冶な陶醉はそのまま受け入れたい。

満天の星を産みたる春嵐

根岸 善行

「俳句に嘘はいけません、まして吟行句会ですから…」。

四月三日、四日、伊豆支部の企画、藤枝支部が協力し、東京方面からも多数参加して、伊東と韮山方面を吟行した。

かつては当たらないものの代表のように言われていた天気予報も今日ではよく当たる。伊東駅で集合し、バスで吟行地に向かった一行は、予報通り雨になり、道路の両側の満開の桜を満喫したが、それも束の間、そろそろ狩野川が見え出すあたりになると雨に風

も加わって来た。昼の弁当もバスの中で済まし、願成就院や江川邸など室内の見学に重点をおいて、蛭が小島や反射炉などはバスを降りず遠くから眺めただけで、予定を早めて伊豆高原のホテルに引きあげた。

ホテルは駿河湾を一望できる高原の高台にあったので、昼間にあれば絶景の眺望を楽しむことが出来たところ、暗闇の中に吹きつける激しい風音と雨の音にいつか眠ってしまった。

句会は明けて五日の午前中であつた。「嘘はいけません」と言ったのは選句の講評の時であつた。早速、作者から声が上がつた。「午前三時頃には嵐は過ぎ去つて空はきれいに晴れていました。満天の星が輝いていました。嘘ではありません」という。作者は徹夜したか、一日一休んで真夜中に起きて句作に精進したのであろう。嵐の過ぎ去つた空はあおきまでに澄みきり、特に高原であれば満天の星も美しく輝いていたのだ。真剣に努力した者に賜つた句である。

苗植うる土を叩いて命なり

竹久みなみ

苗は、苗その総称であるから、一応季語にもなるだろうが、胡瓜苗、茄子苗、トマト苗などはつきり言つてもらうと、イメージが生きて伝はつて来る。

掲出句はおそらく家庭菜園であろう。胡瓜、茄子、トマトなどは二人家族であれば、二本ずつでも充分である。胡瓜は最盛期には毎朝二本は採れる。トマトも胡瓜ほどではないがやや近い。茄子は水と肥料さえ効いていれば霜の降りる頃まで収穫できる。

さて植え付けだが、苗床の土は出来るだけ崩さないようにして

苗を真直ぐに植え、根元の廻りに少し高めに土を寄せておさえ、最後に「元気に育てよ!」とわが子を愛しみ励ますように土を撫でて軽く叩いて苗の一生を現世に送り出した。下五の「命なり」は言わでもと思ったが、作者の自然に発した本心であろう。

(以下略)

風土集



神蔵器選

枝垂れては空うすくする桜かな 東京

遊橋 恵美

ぎしぎしやひよろり日のうち影のうち

唇にひとひら花の雨ならむ

薄染めの衣一枚花いかだ

女子会のメニューそれぞれ夏隣

パン屋まで遠回りして花の冷え

夷留菜

竹久みなみ

コーヒー館ジローの唄や花ミモザ

花冷えのポンポン船や聖橋

苗植うる土を叩いて命なり

花の舞ふ乗り遅れたるバスが行く

山毛櫨林の梢の先に春動く

東京

林 いづみ

ふきのたう十五個百円道の駅

膝に置く釜飯二つ目借時

かぎろへる壺の泪の無尽蔵

春の雲国旗に風の溜まりをり

きのふより木五倍子の房の長きかな 東京

柿沼 盟子

こでまりや地には触れずに鎖樋

三年の更地や黄蝶紋白蝶

行く春の八日をかけて予定詰め

川の跡さかのぼりゆき春惜しむ

菜の花や淀で束ぬる京の川

相模原

岡本 尚子

初蝶の翅に浮き立つ生命線

初蝶や午後のストロー浅く吸ふ

落音のオルガンの息春惜しむ

残心を乱す風情や花吹雪

鳥帰る使はぬ鍵の数多かな

福井

池田 光子

散る花に遅るる風のありにけり

風車はじめの風は地蔵より

水底に円溜りありて蝌蚪生まる

原子炉へ枝のびてゐるさくらかな